

芸術表現の哲学的意味を探る

吉永 誠吾

Exploring the Philosophy of Artistic Expression

Seigo YOSHINAGA

(Received October 3, 2011)

Human emotion cannot easily be seen. Although we try to convey our feelings with words, sometimes words are insufficient to convey what we exactly feel. Thus, it is not easy for us to completely understand each other. In my books, I have stated that art can be an important means of communication to represent what we feel. Based on this statement, with passion, I have taught the theory of music and its methodology to my students. I also have performed music to share such emotion with audience, including children. This energy to support my activities is deeply related to my personal experiences and I've now found that it contains some philosophical meanings. Therefore, in this paper, I'd like to explore my passion for music that originated in my experience and its philosophy.

Key words : philosophy, artistic expression, communication, music, energy

はじめに

人の心は目に見えるものではない。また、心に思っていることを言葉で伝えようとしても正しく伝えることができないこともある。うれしいというとき、あるいは悲しいというとき、その人がどれくらいうれしいのか、あるいは悲しいのかはわからない。だから人が本当の意味で互いに理解し合うということは容易ではない。だからこそ、筆者は拙著を通じて、芸術は人が感じていることを互いに伝えあう重要なコミュニケーションの手段となりうるということを述べたのである¹⁾。そしてその考え方に基づいた音楽教育の理念や方法論を授業を通して学生たちに語りかけるとともに、様々な演奏活動を通じて子どもたちや聴衆と音楽の感動を分かち合う活動を行ってきた。その活動を支えるエネルギーには、筆者の個人的な体験が深くかかわっており、そこには哲学的な意味が含まれていると考える。

そこで本論文では、筆者の個人的な体験から生まれた、音楽に対する情熱を支えるエネルギーについて述べるとともに、その哲学的意味を考える。

1 哲学とは

哲学の根本的な命題はデカルトが述べた「私は考える、それ故に私は有る」であろう²⁾。私たちは常日頃、自分がここに存在すると思っており、そこに何の疑問も持っていない。しかしバートランド・ラッセルも述べているように、もしかしたら夢を見ているかもしれないのであり、自分やまわりの世界が確実にここに存在することを証明することはできない。けれども、たとえ夢を見ていようとも自分は確実にここにいるに違いないと考える。なぜなら、もし自分がここにいなければ夢を見ることそのものもあり得ないであろう。だからこそ「私は考える、それ故に私は有る」と考えるのである³⁾。

様々な生物の、その生命力は驚嘆に値する。こんなところと思うような場所に植物の種子が運ばれ、芽を出し葉を広げ、花を咲かせている。小さな魚たちは、より大きな魚に食べられても絶滅しないように、おびただし数の卵を生んでいる。生物はすべて、自分の意志で生まれたわけでもないのに、可能な限り自分の子孫を残そ

うと努力している。しかしどの生物も一回限りしか生きることを許されていない。その中で唯一、人間だけが自分の生命に限りがあることを知っており、この広大な宇宙空間に、また遠い過去から遠い未来への気の遠くなるような永い時間の中に、ただ一度しか存在しえないことも知っている。だからこそ芸術などでお互いに同じ感動を味わい、自分たちの存在を確かめ、連帯感を増すことに大きな情熱を注ぐのである。だから芸術の働きには哲学的意味が含まれている。

2 死の意味するもの

あと一息のところであらうと危うく死ぬところであったというような経験は、案外、多くの人を持っているかもしれない。そしてそのような経験は、いわゆる PTSD (post traumatic stress disorder) と言われるような大きなショックを与えるかもしれない。しかし逆にそのようなショックから立ち直ることによって、生きることに對する、より強固な目的意識やしっかりした人生観を獲得することになるかもしれない。言い換えれば、そのような経験があるかないかは、その人の人生観や死に対する考え方に大きな影響を与えるといえよう。また、そのような人生観や死生観が芸術活動の大きなエネルギーになるのかもしれない。実際、筆者にとって、いろいろなハンディを抱えながらもヴァイオリン演奏にこだわり続けたそもそもの動機はそのようなものだったと確信している。

(1) 臨死体験

筆者にとって臨死体験と言えるその経験は小学6年の夏に起こった。友達数人と池に泳ぎに行き、危うく溺死するところであった。今でもそのときの経験は筆者の脳裏に鮮やかによみがえってくる。全くの金づちであったにもかかわらず、足を滑らして深みにはまってしまったのである。水中で叫ぼうが、わめこうが空気を吸うことはできない。一度、水面に浮いて、ほっとした太陽の光を見ることができたが、呼吸ができるほどに浮くことはできず、再び水中に沈み、苦しみもがくうちにいつの間にか気を失っていた。意識が戻ったのは、すでに筆者が助け上げられ、飲み込んだ水を吐き出した後であった。近所に住んでおられた萩尾又次さんという方が着の身着のまま飛び込まれ、筆者を水の中から救い上げて下さったのである。萩尾さんによれば、そのときすでに筆者の意識はなかったが、萩尾さんが筆者を背中にかつがれ、筆者が飲み込んだ水を吐き出すと同時に「うーん」となったそうで、萩尾さんは筆者が助かると思われたそうである。

(2) PTSD

二度目に死を強く意識したのは高校3年の夏であった。広島か長崎の原爆記念日にNHKが放送した原爆の惨状の映像を見ていた時であった。その時に筆者に起こった事をあえて言葉にするならば、極度に緊張していた神経の糸が、ついに耐えきれなくなって、まるでぷつんと切れてしまったような感覚と言えるであろうか。あるいは、ぜんまいをもとに戻れなくなるまで引っ張ってしまったような感覚と言えるかもしれない。あるいは、もしそれを絵に表すならば、ムクの『叫び』に表現されたような感覚とも言えよう。いずれにしても大学入試を挟んで数カ月間、筆者はまるで夢遊病者のように不眠と極度の不安の中で過ごした。友人の薦めもあって筆者は荒尾市のキリスト教会に通った。そこには筆者が今までに出会ったことがないような、心優しい人々との出会いがあった。大学ではオーケストラのクラブに所属し、無我夢中でヴァイオリンを弾いた。

3 二つの十字架

(1) ヴァイオリンを遅くから始めることの困難さ

筆者がヴァイオリンを弾き始めたのは、父が高校の入学祝いにヴァイオリンを買ってくれてからである。中学校でコーラス部に所属し、そのコーラス部員の中にピアノを上手に弾く女生徒にひそかにあこがれを抱いていた筆者は、高校では迷わず音楽クラブに入部した。そしてその年に音楽クラブの有志が集まり器楽クラブが発足した。そして筆者はコーラスと器楽の両方のクラブを3年間続けた。

ヴァイオリンを遅くから始めてプロの音楽家を目指すことの困難さは、外国語の学習を遅くから始めて、専門家を目指すことと共通しているといえよう。技術的な困難もさることながら、読譜力などもそう簡単に身につくものではない。ただ、精神的に苦境にあった当時の筆者としては、ヴァイオリンを弾くことによって必死に自分の存在を確かめたかったし、そうすることが筆者にとっての唯一の救いの道でもあったのである。

(2) 小指との闘い

小学6年の時に筆者は、鋭い刃物で危うく左手の小指を切り落としてしまうような大けがをしてしまった。骨は完全に切れており、辛うじて指の先がぶら下がった状態であった。医者は指先を切り捨てることを薦めたが、父はなんとかしてつないでくれと懇願した。お陰で辛うじてつながったが、右手小指に比べるとおよそ1センチメートルほど短くなったうえに第1関節は曲がらず、おまけに指先がやや内側に曲がっている状態であった。この小指の問題は、遅くから始めたハンディに加え、まるで十字架のように筆者のヴァイオリン人生に重くのしかかることとなった。特に3度の重音奏法などでは大きな障害となった。

4 筆者のヴァイオリン人生

(1) ヴァイオリニストを目指して

筆者が音楽の道に進むことができたのはひとえに恩師たちの激励の賜物であった。当時、高校の音楽担任であった金森先美重先生は、筆者が音楽の道に進むことを両親に強力に奨めてくれた。父は、筆者が国立大学の教育学部で音楽を専攻し、卒業すれば教師になれるという可能性を示すことで音楽を学ぶことをやっとなめてくれた。

大学へ入学すると今度は恩師の合谷春人教授がわざわざ我が家を訪問され、筆者を東京芸術大学の委託生として留学させることを進めてくださった。さらに熊本大学を卒業し、東京芸術大学に改めて入学することを決意したとき、当時、高校の器楽部の顧問で、後に熊本大学教育学部国語科（書道）の教授になられた森山秀吉先生がやはり直接父をたずねられ、父に向かって「誠吾君に投資してみませんか。」と言われたそうである。父は「投資ですか。」と森山先生の申し出にいささか困惑したようであったが、このような恩師の一方ならぬ励ましに支えられて、筆者は再び東京芸術大学に進学することが許されたのである。

東京芸術大学の入学試験の課題曲の一つはバッハの『シャコンヌ』であった。この曲の冒頭では二短調のDFAの和音を同時に弾くことによって開始される。小指の問題を抱える筆者にとって最も困難な課題といえるものであった。当時、師事していた二村英之先生も「ついてないなあ」と言われたのを覚えている。そこで、この困難を克服すべく、課題曲発表から入試まで、一日、約7～8時間の練習を強行した。すべての入試が終わってから一週間、39度の熱が下がらなかったのは、筆者の体力、精神力ともにほとんど限界に達していたのであろう。

(2) 本物のヴァイオリンの音を求めて

東京芸術大学入学後、2年生に進級する年の4月に結婚し、翌年、長男が生まれた。妻は東京都葛飾区立高砂中学校で音楽の教師として勤務し、家計を支えた。

芸大在学中に忘れることのできない出来事があった。副科ピアノの担任の先生が出産のために休職されることになり、その先生の受け持ちの学生はすべて他の先生に振り分けられた。筆者は小林仁教授の受け持ちとなった。小林教授といえばその当時、我が国の代表的なヴァイオリニストの海野義雄氏と度々リサイタルを開催されていた高名なピアニストであった。その小林先生がある日のレッスンで「吉永君はヴァイオリンですか。ヴァイオリンは右手で弾くんだそうですね。」と言われた。このなぞのような言葉を筆者はどう理解しよいか分からず、そのまま二村先生にたずねてみた。二村先生は「せっかく芸大に入ったんだ。そんな変なことなんか考えずに一生懸命勉強して卒業し、九州に帰れば、お弟子さんも集まってくるだろうし、食うに困らないだろう。」というような意味のことを言われた。筆者はそんなふうに言われるとかえってそのなぞが気にかかり、その後ずいぶん長い間、苦悶の日々が続いた。ある時、弓をヴァイオリンに強く押し付けて弾いていると先生は「音をつぶしているよ。」とおっしゃった。そこで今度は軽く弾くと「スカスカだ。」とおっしゃる。妻にも「今日の音はどう。」とたずねると「うーん、分からない。いいかも。」とはっきりしない。そのような毎日が一年以上も続いたであろうか。忘れもしないフランクのソナタを練習していたときだった。第1楽章の表情が自分でも分かるほどいつもと違っていった。二村先生も「お！」と目を丸くされた。

芸大では3年生のとき、学内演奏が公開の場で行われることになっている。その演奏で筆者はベラチーニの『ラルゴ』とブラームスの『スケルツォ』を演奏した。学内演奏が終わってしばらくして、海野先生が廊下で筆者を呼び止められ、「君のやっていることは私たちがやっていることと同じだよ。」と励ましてくださった。筆者はまるで天にも上っていくような気持ちであった。

卒業後さらに筆者は大学院に進み、浜野政雄教授の下で音楽教育学を学んだ。大学院修了と同時に母校の熊本

大学に採用され今日に至っている。

熊本大学在任中、リサイタルをはじめ、さまざまなコンサートを行ってきた。その中でも特に昭和60年のリサイタルは、忘れることのできないものであった。同僚の中山孝史氏の伴奏でショーソンの『詩曲』をメインにバッハとブラームスの第1番のソナタ、バルトークの『ルーマニア民族舞曲』、チャイコフスキーの『メロディ』、ファリャ＝クライスラーの『スペイン舞曲』、箏曲の山川玉枝さんをゲストに迎え、宮城道雄の『春の海』といった、意欲的なプログラムであった。しかし筆者の左腕はこのリサイタルでオーバーヒートしてしまったようだ。リサイタルを終えた後しばらくして左手の小指と薬指がしびれ始め、そのしびれは一向に治る気配を見せなかった。筆者はさまざまにマッサージや指圧などをしてみたが悪くなる一方で、ついに左手の運動機能が著しく衰え、握力が15キログラムにまで陥るに至った。その後、ワラにもすがる思いで、整形外科や鍼灸院に通った。この中で鍼灸の治療が功を奏したと思われる。数カ月後、一応、ヴァイオリンを演奏できるまでに回復したが、その後遺症は腕や肩などの筋肉がひきつったような感覚としていまだに続いている。

この出来事は、これまでのような練習方法はもはや限界であり、無意味であることを告げている。その後、筆者は二度にわたり元バイエルン放送交響楽団首席奏者でミュンヘン音楽大学教授のエルネ・セバストチェン氏の元で研鑽を積むことができた。このことは、いろいろと困難を抱え続けていた筆者にとって大きな救いとなった。氏の勧めでカール・フレッシュのスケールシステムを毎日欠かさず練習したことは3度や10度の重音奏法を始めとして、ほとんど不可能と思っていた技術上の困難を徐々に克服することができた。ポジション移動やビブラートなども自然に行えるようになり、特に意識する事なく自然に音楽表現ができるようになった。筋肉がひきつったような感覚も少しずつ改善されてきているようで、最近ではチャイコフスキーやメンデルスゾーンなどの協奏曲の演奏にも技術上の困難さをほとんど感じなくなっている。もちろんヴァイオリニストとしての筆者の実力はまだまだ中途半端であり、これをもし富士登山にたとえるなら、筆者が5合目くらいにいるのか、あるいは7合目くらいに登ったのかはわからない。いずれにしても、生命ある限り、より大きな可能性に向かって努力していくしかないであろう。

(3) 演奏活動を振り返って

筆者は、平成11年に音楽科に大学院を設置するために、器楽から音楽教育へポストを移した。従って演奏活動が大きく制限されることになったが、これまで述べた理由から、演奏そのものは途切れることなく続けてきた。特にその演奏曲目については、スクールコンサートやチャリティーコンサートなど、小規模の演奏会が中心となったため、ポピュラーな小品を演奏する機会が多くなった。その演奏活動の詳しい内容については、拙著その他で述べたとおりであるが⁴⁾。しかしどのような演奏会であれ、一貫して求めてきたのは聴衆との感動体験の共有である。そのような演奏活動のまとめとしてCD『癒しのためのヴァイオリン名曲集』をリリースした。

また、前任者の退官に伴い、顧問をしている熊本大学フィルハーモニーオーケストラの定期演奏会、サマーコンサート、演奏旅行などにも力を注いだ。その中でRKK熊本放送が同オーケストラの演奏旅行に同行、取材し放送したニュースは、大変心温まる内容であった⁵⁾。

(4) 音楽療法へのチャレンジ

『醜いアヒルの子』という童話がある。この童話はアヒルに育てられた白鳥が、回りから常に醜いと言われながらも、産毛が取れて突然美しい白鳥に変わるという物語である。芸術を志す者に最初から人を感動させられるような人はいない。自分自身の芸術がまだまだ未熟であり醜いという意識を常に持ち続け、だからこそその醜さを克服しようと努力することによってその芸術に磨きがかけれ、いつの日か人を感動させることが出来るようになると思う。醜いアヒルの子は突然美しくなるが、芸術は努力によって人を感動させることが出来るようになるのである。

このような音楽による感動の力を、病気の症状の軽減に役に立てられないかと考えている。医学が発達し、病気に対するさまざまな薬物や手術による治療が発達したが、当然、薬物には副作用があり、手術には痛みが伴う。そもそも病気になることそのものが、様々なストレスなどが原因であることも分かってきている。もしかしたら生きる喜びと希望を持ち続けることが病気の予防にもつながるかもしれないし、たとえ病気になってもその症状を軽くすることができるのではないかと考えている。そこで熊本大学付属病院発達小児科医師の友田明美準教授（現在は福井大学）に依頼し、筆者が制作したCDを用いて、病気療養中の患者に対し、ヘッドフォンで鑑賞させてそれが症状の改善につながるかどうか実験を開始した。もちろん病気の治療に音楽が直接役に立つなどと考えているわけではない。むしろ、病気療養中であっても、音楽によって心を明るくし、希望を持ち続けることが病気に対する抵抗力となるのではないかと考えているのである。

(5) 限りある生命の叫び

筆者のヴァイオリン演奏に対する情熱は、二度ほど生命を脅かされた経験を含めて、生きるということの意味を真剣に考えさせられたさまざまな経験によって支えられている。生命には限りがあるが、死を認識できるのは人間だけだと言われる。だから文明が生まれる。先に述べたデカルトの「私は考える、それ故に私は有る」という言葉は、自己の存在証明に他ならない。音楽には、感動体験の共有という現象が起きることがある。この、ある一つの音楽が複数の人々を同じ気持ちにさせるという現象こそ、私たちの人間としての存在証明であり、真の芸術と呼ぶにふさわしい音楽である。だから「私たちは考える、故に私たちはある」のだ。芸術は、限りある生命の生きている証しであり叫びであり祈りである。

ウィーンへ小旅行をしたおりに、ベートーヴェンが遺書を書いたハイリゲンシュタットの家を訪ねた。そこにはベートーヴェンが血判を押した遺書がおいてあった。ベートーヴェンがもし本当に自殺してしまったら、その後の音楽史はどうなっていたであろうか。果たしてベルリオーズやリスト、ワーグナー、ブラームスなどのロマン派の音楽の発展があったであろうか。ベートーヴェンに限らず、偉大な芸術家の中には死に直接立ち向かい、素晴らしい作品を残している人が多い。チャイコフスキー、画家のゴッホなどもその例に挙げられよう。だから彼らの芸術は人の心を強く打つ。

(6) 形式と中身

二度の留学体験を通じて思うことは、日本人は非常に形式を重んじる国民であるということだ。このため様々な行事の中には中身がなくなり、形骸化してしまっているものもあると思われる。しかし、終戦記念日や広島、長崎の原爆記念日をはじめとして、様々な大災害に際して行われる記念式典は、遺族にとっては決して形だけで済まされるものではないだろう。特にクラシックのコンサートで、できるだけ早く終わってほしいと思わせるようなコンサートが多いように思われる。何のためのコンサートなのかよくわからないからだ。

トルストイが言うように、私利私欲や見せかけだけのため芸術は本当の芸術とは言えない⁶⁾。自分自身が芸術家であると自認するのであれば、本物の感動を与えてくれる芸術家の心からの叫びにもっと耳を傾け、自分自身もまたその感動を多くの人々に伝えなければならない。感動は人間がよりよく生きようとするための本能のようなものであろう。そしてその感動体験は、クラシックの音楽会などよりはスポーツ観戦やポピュラー音楽のコンサートなどに奪われてしまっているという現実を、クラシック音楽に携わる私たちはもっと真摯に受け止めなければならない。

筆者は今、心を落ち着けてスケールを弾く。そしてこれを一種の祈りとして毎日続けている。そのような練習を継続することが、筆者自身の心からあふれてくる思いをより容易に人に伝えることができると信じるからである。音楽家が奏でる音は、その音楽家の心を表現する音でなければならない。これこそが「ヴァイオリンは右手で弾くものだ」という言葉の本当の意味である。そしてそのような音で表現された音楽こそが本当の音楽と言えるのだ。ただ単に楽譜通りに音を並べることができても、それは芝居における台詞の棒読みと変わらない。既に六十歳を過ぎ、どれほどの可能性が筆者に残されているか分からないが、「うさぎとかめ」の童話に象徴されるように、生きている限り一步一步、目標に向かってひたすら努力を続けていくことが筆者に課せられた課題だと思っている。

注

- 1) 吉永誠吾著『音楽とコミュニケーション』、熊本日日新聞情報文化センター、2006年3月
- 2) デカルト著、落合太郎訳『方法序説』、岩波書店、昭和43年8月、p.45
- 3) パートランド・ラッセル著、生松敬三訳『哲学入門』、角川文庫、1965年4月、p.22-23
- 4) 吉永誠吾著『音楽とコミュニケーション』、p.145-153及び吉永誠吾著『音楽鑑賞教室の軌跡』、浜野政雄監修『音楽教育の研究—理論と実践の統一を目指して—』、東京芸術大学音楽教育研究室創立30周年記念論文集編集委員会編、音楽の友社、p.415-425
- 5) これは2008年9月2日に放送された。
- 6) トルストイ著河野与一訳、『芸術とは何か』、岩波書店、1967年、p.61及びp.148-155